

---

# アレな妹と苦労人の兄のこれまた日常

マーボー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アレな妹と苦労人の兄のこれまた日常

### 【Nコード】

N1583S

### 【作者名】

マーボー

### 【あらすじ】

これはかなりアレな妹と、その妹に振り回されて苦労する兄の日常での会話を抜き出したものをそのまま描いたものです。

過度な期待はしないでください。（みなみけ風？

（前書き）

なんか、前回のが好評だったようで…。

まあ今回も少しですが、投稿してみました。

もうひとつの「どうしてこうなった?! 神による転生者の輪廻物語」も執筆していますが…少し詰まっています。

すいません。

こちらを気分転換にやっている状態です。

なので、「どうしてこうなった?!」の方はもう少々お待ちください。

## 第六十一話

兄「うーん、キーボードが汚れてるなあ」

妹「兄さん、パソコンの掃除ですか？」

兄「ああ、そうなんだけど……キーボードの隙間に入った埃を、どうしようかと思って」

妹「ふむふむ、なるほど」

兄「こう、細長くてモコモコした掃除用具があると便利なんだけどなあ」

妹「兄さん、これで代用できませんか？」

兄「うん無理だね、タポンは掃除するためのものじゃないからね」

## 第六十二話

妹「うーん……」

兄「どうした妹、悩み事か？」

妹「いえ、ご飯の時にですね、兄さんが炊飯器の近くに座った場合……」

兄「うんうん」

妹「こう、兄さんにおかわりをお願いするって、女の子として恥ずかしいというか……」

兄「お前が恥じらう方向性に疑問を抱かざるを得ない」

## 第六十三話

妹「でも、女の子としては重要なことですよ」

兄「だったら、言い方とかを変えてみたらどうだ？少しは違つかもしれないぞ」

妹「なるほど、言い方を」

兄「おう、まあ気休めかもしれないけど」

妹「私に、白いのをいっばいくださいっ！……なんていうのは」

兄「明日から毎日炊き込みご飯にしてやろうか」

## 第六十四話

兄「どうも寝起きが悪くて困る……何か良い方法は無いかなあ」

妹「目覚ましを変えてみてはどうでしょう？」

兄「目覚ましを？」

妹「ただ音が鳴るものではなくて……こつ、携帯を置いて、バイブレーションの振動で起きるとか」

兄「おお、それは効き目があるかもな！」

妹「はい！でも私の場合、振動でそのまま気絶しちゃったりするんですけどね！」　クスクス

兄「携帯を置く場所について話し合う必要がありそうだ」

## 第六十五話

妹「最近の携帯って、アンテナが内蔵されている物がほとんどですよね」

兄「そうだな」

妹「あの突起と振動のコラボレーションが堪らないのに……」  
ギ  
リリ

兄「そんな心底悔しそうな顔をされても反応に困るんだが」

## 第六十六話

兄「おおー、このロボットかつこいいー」

妹「懐かしのロボットアニメ特集ですか」

兄「うん！やっぱドリルは男のロマンだな！」

妹「なるほど、兄さんはドリルが好きなんですネ」

兄「わりとな！」

妹「なるほど、兄さんは掘る方が好きなんですか」

兄「お前の発言には他意が見え隠れしてるんだが」

## 第六十七話

兄「なあ妹、俺の枕が見当たらないんだが」

妹「あ、兄さんの枕でしたら、今日お布団と一緒に干しました」

兄「おお、ありがとう」

妹「ですが、その後少し染みをつけてしまったので。もう一度洗って干しておきますね」

兄「待て、何の染みだ」

妹「こつ、足ではさんだり擦りつけたり」

兄「ごめんやっぱり説明しないで」

## 第六十八話

妹「兄さん、押入れを整理していたらこんなものが出てきました」

兄「おお、昔使ってた玩具か。懐かしいなあ」

妹「このおままごとセット、覚えてますか？よく二人で遊びましたよね」

兄「よく覚えてるなあ、俺なんかうつすらとした記憶してないのに」

妹「こついう思い出の品を見ながら昔を思い出すというのも、なか



なが良いものですよ」

兄「まあ、確かにそうかもな」

妹「……あつ、おままごとで使っていたYES・NO枕もこんなところに」

兄「こんな記憶は思い出したくなかった」

## 第六十九話

兄「買い物も終わつたし、そろそろ帰るぞ」

妹「そうですね、兄さん」

兄「……言っておくけど、向うにある『AVコーナー』っていうのはオーディオ・ヴィジュアルのことだからな」

妹「もうっ、そのくらい知ってます。バカにしないでください」

兄「それは悪かった」

妹「まあ、『おもちゃうりば』のコーナーには少し卑猥さを感じますけど」

兄「こいつは重症だぜ」

## 第七十話

兄「俺の知り合いに、高所恐怖症の奴がいてな。色々と不便そうだな」

妹「そうなんですか、大変そうですね」

兄「そうなんだよ」

妹「もし暗所恐怖症の人と閉所恐怖症の人が結婚したら、さぞかし大変でしょうね」

兄「なんでまた？」

妹「だって、真昼間の野外でしか子作りできませんよ」

兄「真剣に悩んでる人に全力で謝れ」

## 第七十一話

妹「胸座と言ったら、服の襟の部分などを指すのが主ですよな」

兄「そうだな」

妹「なのに股座の意味を調べたら、服の部分じゃなくて両腿の間、

股間のことらしいです。これって不思議ですよね」

兄「その前に何故『股座』なんて単語を調べようと思ったんだお前は」

## 第七十二話

妹「あ、兄さん。リモコン取って下さい」

兄「ああ、ほらよ」

妹「あ、違います。テレビのリモコンじゃないです」

兄「ん？ああ、エアコンのか」

妹「いえ、そっちでもないです」

兄「じゃあ何のリモコンだ」

妹「そのローーのリモコンです」

兄「自分で取ってくれ、お願いします」

第七十三話

兄「映画館なんて久しぶりだなー」 ヒソヒソ

妹「はい、楽しいですね」 ヒソヒソ

グーッ、グーッ……

兄「むむっ」

妹「誰でしょう、マナー違反ですよね」 ヒソヒソ

兄「そうだな、上映中は電源を切っておいてほしいもんだ」 ヒソ  
ヒソ

妹「はい。こんな所でバブの電源を入れっぱなしだなんて」 ヒ  
ソヒソ

兄「お前、とりあえず映画館出たら説教だからな」 ヒソヒソ

第七十四話

妹「私の学校の先生で、駄洒落ばかり言う先生がいるんです」

兄「ほほう」

妹「面白いなら良いんですけど、その……結構、寒いと言いますか」  
兄「なるほど、滑ってるわけか。駄洒落と言うよりオヤジギャグだな」

妹「そういうことですね、困ったものです」

兄「ああ、困りものだな」

妹「せめてパロディもののＡＶのタイトルくらい面白かったら良いんですけど」

兄「ああ、お前の方が困りものだということを忘れてたよ」

## 第七十五話

妹「……ぶらり温泉旅」

兄「いいなあ、温泉」

妹「ぶらり……」

兄「？」

妹「……温泉街とはいえ、野外で露出して良いものなのでしょうか」

兄「お前の着眼点のズレっぷりは予想の斜め上に行くね」

## 第七十六話

兄「腹減ったー……あ、ポテトはLサイズをお願いします」

妹「兄さんはファーストフードが好きですね」

兄「ああ、たまにはジャンクなものも食べたくなるんだ」

妹「私は小食なので、メニュー表を見てるだけでお腹が一杯になりそうです」

兄「さすがにそれは無いだろう」

妹「というより、この『S』や『M』の文字の横に『ド』と書き加えたい衝動を抑えるので精一杯です」

兄「店員さん早く持ってきてくれ、早く!!!」

## 第七十七話

兄「うーむ、鼻がムズムズする」

妹「今日は風も強いですから」

兄「あー、クシャミが……は、ふあ……っ」

妹「はい兄さん、ティッシュです」

兄「あ、ありが……ふあ、ふあっ……」

妹「……………」

兄「ふあ、フ」「ピーーーー」「ツクションー！」

妹「ふう、危なかったですね。ちゃんと放送禁止用語にはピー音を入れておきましたから」グッ

兄「何その余計すぎる気遣い」

## 第七十八話

兄「あはは、見ろよこれ」

妹「ふむふむ、『濁音を半濁音にするだけで迫力が半減する』ですか」

兄「ボンバーンなんかボンパーマンだぜ、めちゃくちゃ弱そうだよな」アハハ

妹「ふふっ、そうですね。パイプになっちゃったら全くの別物です

しね」　ウフフ

兄「ああ、まあ、うん。お前がその単語を選ぶのは、まあ予想してただけだね」

## 第七十九話

兄「伏せ字って重要だよな」

妹「そうですね、場によっては死活問題にもなりますし」

兄「うんうん」

妹「でも、使い方によっては事態を悪化させる場合もあるかもしれ  
ません」

兄「え？なんで？」

妹「たとえばテニスなんですけど、　ニスプレイヤーになっちゃっ  
たら、どんな卑猥な競技をやっているのかということに」

兄「そもそもテニスという単語に伏せ字を使う理由が見当たらない  
んだが」



## 第八十話

兄「妹、今日の学校はどうだった？」

妹「はい、兄さんの話題で持ちきりでした」

兄「な、なんでまた？」

妹「二人で映画を見に行ったとき、クラスメイトが私達を目撃したらしく」

兄「ああ、あの時か」

妹「この年頃にしては仲が良い兄妹ということで、羨ましがられましたよ」

兄「なるほどな、まあ羨ましがられるってのは悪い気分じゃない」

妹「はい。それから、私と兄さんがどれほど深く愛し合っているかという話に発展しまして……」

兄「どうしよう、俺明日から迂闊に出歩けないよ」

## 第八十一話

兄「まだ買い物途中だが、喉が渴いたな」

妹「あ、その自販機で買ってきますよ」

兄「悪いな、頼むよ」

・ ・ ・

兄「いくら紙コップ式の自販機だからって、あそこまで慎重に歩かなくても」

妹「……………」 ソロリソロリ

兄「おい、大丈夫か？」

妹「はい、大丈夫です！……あははっ、やっぱり検尿のカップを持つてる人みたいですよね」 ウフフ

兄「いや、そんな想像は微塵もしてなかったんだけど」

## 第八十二話

兄「しかし、妹の暴走ぶりには困ったもんだ……せめて、もう少し恥じらいを持って欲しいものだが」

ガラッ

妹「っ！？」

兄「なんだ妹、もう帰ってたのか」

妹「きつ、きゃあああっ！に、ににっ、兄さんのえっち！！」

兄「は？」

妹「み、見ないでください、出て行ってください！兄さんのえっち！変態！」

兄「わ、わかった、出て行くよ」

ボタン

兄「……爪を切つてるところを見られるのは恥ずかしいとか、あいつの羞恥心の基準がわからん」

## 第八十三話

兄「クイズ番組は良いよな、色んな知識も得られるし」

妹「はい、楽しめて学習もできて、一石二鳥です」

テレビ『では次の問題。ダイエットなどにも利用される、長い時間をかけて酸素を消費し、身体内部に有益な効果を生み出すことのできる運動とは？』

兄「まあ、これは簡単だな」

妹「はい！」

テレビ『はい、正解は有酸素運動でした！』

妹「あれっ、ピストン運動は？」

兄「さーて次の問題は何かなー」

#### 第八十四話

兄「そういえば、振動で筋肉を鍛えるダイエットマシンがあるよな」

妹「はい、ありますね」

兄「あれって、そんなに効き目があるのかなあ」

妹「もうっ、あんなの嘘に決まっているじゃないですか」

兄「そうなの？」

妹「振動を与えるだけで鍛えられるのなら、私は今ごろ不感症になっちゃってますよ」

兄「お前はそれを俺に言っただろうしたいの？」

## 第八十五話

妹「兄さんはツッコミ体質ですね」

兄「そうしないとお前は暴走しっぱなしだからな」

妹「私の心と体は準備が整っているというのに、兄さんはいつになつたら私に突っ込んでくれるのでしょうか」

兄「年頃の女の子らしくアンニュイな溜め息を吐いたりしてるけど、言ってることは最低だぞお前」

## 第八十六話

兄「おい、妹よ」

妹「あれ？兄さん、お風呂に行っただのでは？」

兄「まずは、あの用途不明なマットを片付けてくれ」

妹「兄さん、もうローションをまいてしまったんですか？転んだりする危険もありますから、ちゃんと横になってから私が……」

兄「片付けろって言ってんだよ」

## 第八十七話

兄「急にうどんが食べたくなった」

妹「あ、いいですね。今日のお昼はおうどんにしましょうか」

兄「いいねー。きつねもいいし、カレーうどんもいいし」

妹「ぶっかけうどんとか」

兄「……………」

妹「ぶっかけうどん。おすすめです」

兄「……………」

妹「ぶっかけ」

兄「今日の昼はラーメンにしない？」

## 第八十八話

兄「本当にお前は卑猥な発言ばかりだな」

妹「そんなことはありませんよ。あ、今夜こそ抱いてもらえますか？」

兄「それが卑猥だって言ってるんだよ。とにかくその口を閉じなさい」

妹「ええー」

兄「えー、じゃない」

妹「上の口を閉じたとして、下の口はどうすればいいんですか？」

兄「実の兄にする質問じゃないよそれ」

## 第八十九話

兄「なあ、つかぬ事を聞くんだが」

妹「はい」

兄「その、お前は、そういう卑猥な発言というか、そっちの知識がわりとあるようだが」

妹「もちろん処女ですよ？」

兄「よく臆面も無く言えるな」

妹「でも事実ですから」

兄「そ、そうか」

妹「ちなみに、ちゅーだって兄さん以外の人としたことないです」

兄「いや、幼稚園児の頃だろ、それ」

妹「いつだろうと関係ありません。私には兄さんだけなんですよ」

兄「……………」

妹「ところで兄さん、お風呂でマッドプレイの話に戻るんですけど」

兄「戻らないよ、そんな話はしてなかったよ。チクショウちょっとシリアスになったらこれだよ」



第九十話

妹「うーん……」

兄「お、どうした妹。家計簿とにらめっこして」

妹「いえ、私もそろそろ節約術を身につけなければ、と思ひまして」

兄「ずいぶんと主婦的なことをやるんだな」

妹「いずれ役に立つことですから。それで、どこを削れるか考えていたところです」

兄「ふむふむ」

妹「食費、家賃、光熱費、水道代……」

兄「そこら辺は削りにくいところだなあ」

妹「通学費、雑費、兄さんのティッシュ代、あとは……」

兄「俺がいつ家計を切迫するほどのティッシュを消費したってんだ」

第九十一話

兄「なあなあ、妹」

妹「何ですか？兄さん」

兄「お前って、ホチキスって言う？それともホツチキス？」

妹「うーん……私はホツチキスですね。それが何か？」

兄「ああ、学生会の書類で消耗品リストを作らなきゃいけないんだけどさ。どっちの呼び方が正しいのか、わからなくなっちゃって」

妹「なるほど。そういうのって困りますよね」

兄「うんうん、困るよなあ」

妹「私も、たまにイマラチオだったかイラマチオだったか忘れちゃいますし」

兄「そんな単語は永遠に忘れたままでいい」

## 第九十二話

兄「いやあ、ついボーツとしちゃってさ。ローソンで『ファミチキください』って言うっちゃった」

妹「ふふっ、それは恥ずかしいですね」 クスクス

兄「ああ、本当に恥ずかしかった」

妹「例えるなら、Hな本を普通の雑誌の下に隠してレジに置くはずが、間違えて普通の雑誌の上にHな本を置いてしまった時のような」

兄「微妙にわかりやすいけど、すつごく同意したくない」

## 第九十三話

妹「兄さん」

兄「はい、はい、そうです。そこをクリックしてからですね……」

妹「あ、電話中でしたか」

兄「わかってますって、先輩が機械音痴なことくらい。はい、そうしたら、次はルーターの設定を……」

妹「……………」

・ ・ ・

妹「兄さん、そこに座ってください」

兄「なんだ、電話が終わるなり呼び出して」

妹「先ほどの電話。…どなたからですか？」

兄「ほら、この間お前も会っただろ。学生会でお世話になってる人だよ」

妹「……あんな美人さんに電話でロターの使い方を教えるなんて破廉恥すぎます！」 ビシッ

兄「お前が何を怒ってるのか知らんが、とりあえず最低な勘違いをしていることは確かだぞ」

#### 第九十四話

妹「バブは使わない主義です。バイは使わない主義なんです」

兄「二度も言うな。そして誰もそんなことは聞いてない」

妹「はじめては兄さんのつて決めてますから」

兄「だから聞いてないと言ってるのに」

## 第九十五話

兄「あ、今日の味噌汁はいつもと違うな。ダシを変えたのか？」

妹「いえ、そういうわけでは」

兄「……念のために聞いておくけど、変なものを入れてないだろうな」

妹「当然です。愛情は入れましたけど」

兄「なら良いんだけどさ」

妹「たった10グラムで2万円もしたんです、愛情たっぷりですよ」

兄「マジで何を入れた!？」

## 第九十六話

妹「では、最後に衝撃の新事実を」

兄「言うておくけど、『実は血が繋がってない』なんて言われ  
ても騙されないからな」

妹「いえいえ、そんなんじゃないですよ」

兄「じゃあ何だ」

妹「実は、私たちのお父さんとお母さんはですね、入籍してないんです」

兄「え？マジで？」

妹「さらに言うなら、子供の頃から、生まれた頃から同じ名字でした」

兄「……え？それって……え？」

妹「えへへー、さすが私たちの両親ですね、兄さん」

兄「ちょっと待て、突然の新事実にはパニック寸前なんだが」

妹「大丈夫です、私に任せてください！万事うまくいきます！」

兄「何がうまくいくんだよ、もう……」

妹「ふふっ、兄さーん」

兄「な、なんだ？」

妹「えへへ、大好きです」



妹「……なんて、終わると思いましたが？」

兄「いや終わろうぜ、せつかく良い感じに締めたんだからさ！」

妹「良い感じに締めるのは任せてください、骨盤底筋は鍛えてあります！」

兄「だれかこの妹を引き取ってはもらえませんか？！」

## 第九十七話

兄「おい妹、言いたいことがある」

妹「どうしましたか、兄さん」

兄「まず、俺のパンツを勝手に持っていくな。まあ、これは以前から何回も言ってるけどさ」



妹「大丈夫です、使ったら返しますから」

兄「そういう問題じゃない、あと使つとか言うな。それから…」

妹「はい？」

兄「俺のベッドの上にパンツを置いていくな。俺にどうしろって言  
うんだ」

妹「嗅いだり巻きつけたり、擦ったりしてください」

兄「そんなにさっさと要求されちゃうと俺もどうしたらいいかわか  
んないよ」

## 第九十八話

妹「和服っていいですねー」

兄「ああ、いいよな」

妹「下着をつけなくても許されちゃうんですよ」

兄「俺はどんな理由があろうと許さないよ」

妹「あの、兄さんって肌は弱い方でしたっけ？」

兄「うーん、普通だと思うぞ」

妹「金属アレルギーなどは？」

兄「無いはずだ。まあ発症したことがないっただけだが」

妹「なるほど、では念のため手錠は革製のものを注文しましょう」

兄「なるほど、じゃあ念のためにお前が今読んでる怪しいカタログは没収しておこう」

妹「あう…」

兄「そして言うておくけど、着物の下には襦袢っていう専用の下着をつけるんだぞ」

妹「なるほど、襦袢のみがご所望なんですね。わかります」

兄「お前は何一つわかつちやいないよ」

## 第九十九話

妹「うーん、特許を取得するのって難しそうですね」

兄「なんだ妹、何か特許を取れるような発明でもしたのか？」

妹「まだ企画段階ですが、高速振動する自転車のサドルとか」

兄「まず事故が多発しそうだし誰が購入するかもわからないし、何より倫理的にアウトだから断固阻止する」

## 第百話

妹「ふと思ったのですが、この家は広すぎます」

兄「何を贅沢な、この広い家を俺たち二人で使えてるんだぞ」

妹「とりあえず、私と兄さんの部屋は共同でいいですよね？」

兄「その時は俺の生活拠点がネカフェに変わるけどな」

## 第百一話

兄「うわっ、コーラがシャツに……あーあ、早く洗わないと染みになっちゃうな」

ジャー……バシャバシャ

ガラッ!!

妹「兄さんっ！何をしてるんですか！」

兄「え？いや、染みになる前にシャツを」

妹「夢精したパンツなら私が洗いますから！むしろ洗わせてくださいお願いします！」

兄「いいから出て行ってくれ、お願いします！」

## 第百二話

兄「手が離せない妹に代わっておつかいだ」

兄「えーっと、何を買ったっけ？メモ、メモと……」 ペラッ

おかいものメモ

- ・ お醤油
- ・ みりん
- ・ お砂糖
- ・ こんにゃく （温めてもらわなくても大丈夫ですよ）
- ・ キュウリ （ただお料理に使っただけですよ、それだけですよ）

よろしくお願いします、大好きな兄さん

兄「……………」

兄「……さーて買い物だー」　クシャクシャ

### 第百三話

妹「最近の映画はワンパターンなものが多いですねー」

兄「ふむ、例えば？」

妹「とりあえず恋人の片方が病気になって、闘病生活を送って、最終的には死んじゃって終わりというような」

兄「ああー……確かに、そんなんばかりかもな」

妹「もつと近親相姦ものを増やしても良いと思うんです」

兄「あれ？普通の映画の話じゃなかったっけ？」

### 第百四話

妹「兄さん、好きです」

兄「はいはい」

妹「好きです。大好きなんです。愛してます、兄さん」

兄「……うん」

妹「世界で一番好きです。私の全てを貰って欲しいくらい、大好きなんです」

兄「どうしたんだ、急に」

妹「……実は、クラスメイトから兄さん宛てのラブレターを預かりまして」

兄（それで焦ったというか、妬いちゃったってわけか……か、可愛いところもあるじゃないか）

妹「それで、私たちが毎日このように愛を語り合っていると云ったら、いつの間にか噂が学校中に」

兄「フラグへし折るだけじゃ飽き足らず俺の社会的信用まで粉砕するつもりか」

## 第百五話

妹「こんなに好きと言っているのに、兄さんは冷たいです」

兄「俺が情熱的に応えたらどうするつもりだ」

妹「えっ？情熱的に、って……そ、それは……」

兄「それは？」

妹「……あ、あう、あうあう……」

兄「どうした妹、顔が真っ赤だぞ」

妹「あ、あの、ちょっと部屋に行ってきます。べ、別にナニもしないですよ、情熱的に迫る兄さんを想像したりしてませんから」 モジモジ

兄「頼むから、せめて何も言わずに行ってくれないかな」

## 第百六話

兄「国名の漢字表記って面白いよな」

妹「漢字表記というと、アメリカは亜米利加……みたいな漢字ですか」

兄「そうそう、そのまま読んだ方が正確に発音できそうだし」

妹「他には阿蘭陀、西班牙、瑞西……」

兄「さすが妹、博識だな」

妹「さしずめ、イングランドは陰具乱奴ですか」

兄「謝れよ、イングランドの人たちに謝れよ！」

## 第百七話

兄「うおー、このスリッパあつたけえー」

妹「新しいスリッパですか？」

兄「うん、今日買ってきたんだ。モコモコしてて気持ち良いぞー」

妹「わあ、本当ですね。モコモコしてます」

兄「一目惚れして、つい買っちゃったんだ」

妹「兄さんは毛深いのが好きなんですね、なるほどなるほど」

兄「買って早々押入れにしまいたくなつたよ」



## 第百八話

兄「うーむむむ……むむ」

妹「兄さん、どうしました？」

兄「いやあ、カバンの中でイヤホンのコードが絡まっちゃって」

妹「ああ、ありますよね」

兄「だよな、どうしてこんなに絡まるんだろう」

妹「はい、ピン ローターのコードもしょっちゅう絡まりますし」

兄「それ以前に持ち歩くなよ」

## 第百九話

兄「なあ妹、今からスーパー行ってくるけど、何か買ってくるものある？」

妹「えーっと、そうですね……あ、食器用洗剤を買ってきていただけると助かります」

兄「食器用洗剤ね、わかった」

妹「界面活性剤が入ってるものをお願いしますね」

兄「ああ、了解」

妹「あ、界面活性剤と言っても海綿体を活性化させるわけではないですよ。ですから別に精力剤では……」

兄「誰もそんなことは聞いてない」

## 第百十話

妹「兄さんは健康そのものですね」

兄「おう、風邪すらひかないしな」

妹「体が丈夫なことは良いことです、私も嬉しいですよ」

兄「お前のおかげだよ、ありがとう」

妹「……も、もうっ、兄さんったら大袈裟ですよー」 テレテレ

兄（救急箱に備蓄された大量の座薬を見て以来、俺は絶対に病気になるしないと決意したのだった）

（後書き）

マ「とまあ、今回も少しですが投稿しました。」

劉「こんな妹は…」

マ「中々楽しい思うよ?」

兄「見てるほうの意見はね…」

劉「だ、だよ〜」

マ「ま、まだあと少しストックはあるんで、もし気が向いたら投稿しようと思います!」

兄「じゃ、その時は…いつぐらい?」

マ「ん〜、……気が向いたら。」

妹「ではでは〜」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1583s/>

---

アレな妹と苦勞人の兄のこれまた日常

2011年4月6日02時00分発行